はしがき

2018年は日中平和友好条約締結40周年にあたる。この間，両国のヒト・モノ・カネ・情報の交流は不可逆的に拡大したが，中国は改革開放政策への転換から全面的市場化を経て，今日，グローバル大国としての実態を獲得しつつある。21世紀中国の実態（活力と歪み）についてのバランスの取れた理解とともに，日中関係を通時的に捉えそれを多面的に考察することによって有意な関係を構想することが望まれる。その際，中国近現代の歴史的射程に関わる確かな理解は，現代日本の立ち位置を凝視し，20世紀の日中関係，さらには21世紀の東アジア地域秩序と国際社会に関わる今日的課題群をめぐる私たちの有意な思考を担保するという点で，きわめて重要である。

本書は中国近現代史の始点を清朝の斜陽（1800年）におき，21世紀にいたる200年の過程として描写する。第１編「東アジアの転換」は，清朝黄金時代の終焉と内憂外患の頻発，西洋列強との交際の恒常化，日清戦争と東アジア変貌の過程を概観する。第２編「両大戦と中華民国」は，北洋軍閥の時代から国民党の時代にいたる中華民国時代（1912-1949年）を，２つの世界大戦によって特色づけられる20世紀前半期国際政治の一部として論じる。第３編「現代中国の軌跡」は，1949年に成立した中華人民共和国の歩みを，２つの転換（資本主義から社会主義への転換，社会主義から市場経済への転換）として跡づける。

また「序章　近代世界と中国」では，中国近現代の歴史を学ぶことの意味を中国史の文脈から解説し，「終章　日中新時代の見取図」では，日中経済，政治改革，「個」のレベル，歴史認識，経済のイノベーションという視点から，今日の日中関係を展望する。

2019年10月

執筆者一同